

行仙宿・来宿者の対応とNHK取材協力他

◇ 実施日：平成26年5月6日(火)晴く7日(水)晴

◇ 参加者：沖崎吉信、畑林秀味、田中稔昭、

NHK和歌山；斉藤基樹記者

計4名。

朝7時に新宮を出発した。

斉藤記者には、少しでもこの地を広く知って貰いたいとの思いから尾呂志く西山く大沼く葛川く21世紀の森の經由ルートで行仙宿登山口へ。途中千枚田、小松の筏流し、立合川などで車を止め自然の豊かさを満喫して頂いた。

斉藤君はその自然と山の大きさ谷の深さなど、そのスケールの大きさに感激の様子であった。途中パンクするハブニングもあって行仙宿登山口迄3時間近く要した。

さて本日の荷上であるが、小屋内に掲示している写真パネルが破損している為、その代替品2枚と行仙宿竣工記念として作成寄贈頂いた藤村 淳氏の版画の額である。この版画は当時13枚作成された様で3/13が記入されている。これは玉岡さんから松本 良氏に配布された様だが、家で保管しているよりも行仙宿で皆さんに見て頂く方がベストとの思いで寄贈頂いた物である。

登山口には、今晚同宿する田中さんが降りて来られていた。

聞けば直ぐ上で川島、瀧本、松本一郎氏の4名が段差改修を行

っているとのこと。段差材は、根木さんが廃材電柱を調達され、小割りして登山口に運搬された物なので、防腐処理されているので耐用年数が延びると思われる。

小屋に戻らずこのまま帰路に着く瀧本、松本氏と挨拶し小屋へ向う。途中、中の峪ガレ場の石止改修が見事に修復されていた。

相当な時間が必要と思ったが、人の数、段取り、工事の要領の良さから一日で完工された様だ。大きな懸案がひとつ片付いた。

乾、佐藤、榎本さんとも挨拶、昼までの時間干していた毛布の取り込みを行う。昼食時皆さん小屋に集結。

青木さんは、笠捨越巡視路の整備を一人でやってくれた。

玉岡さんは奥駈道を含め歴史ある道は残す整備をすると言われていた。限られた人数ではあるが、この笠捨越と浦向道の1二本は、これからも奥駈道同様に維持管理に努めたい。

昼食も済み乾、佐藤、榎本、青木の四氏が下山された。

我々残留組は小屋内の清掃と片付け。斉藤君は水汲みに降りられた。川島代表も15時過ぎに下山。

夕食迄の時間薪割りを行う。初めての体験をする斉藤君も楽しそうである。水の大切さと併せ火、薪の大切も実感された様である。

17時過ぎから4人で食事(宴会)となった。30分程して一人の登山客が来宿した。水汲みを行って貰う。戻ってから一緒に膳を囲もうと誘う。

聞けば吉野から単独で本宮迄の予定とのこと、昨日の深仙避難

小屋は寒く寝ることが出来なかった上に、今日のアップダウンはきつかったとかなりお疲れの様だ。

福島県磐城市からで63才だそうだ。福島県からと聞けば話はやはり大震災・津波・原発の話となる。話が進むにつれ

・親族・知人にも犠牲者が出た事と、その後の生活も大変なことになっている。

・妻が40才の時ガンで死亡、中学生一人、小学生二人が残され大変だったこと。

・妻が一卵性双生児で全くうりふたつの妹が母親がわりで、大変な協力をしてくれたこと。お陰で子供達も無事成長し、息子は医者になったことなど。

この方も妻や犠牲者の供養も含んでいる様に思われたし、若い方と違い年配者の場合、その経験の深さから、こちらもいろいろと考えさせられることが多い。

我々の活動の評価と本日の接待に感謝として、金一万円を志納箱に入れて頂いた。

翌日の斉藤君は、再度水場へ。我々三人も再度小屋内外の片付・掃除と昨日やり残した毛布干しを行い11時頃下山した。

行仙岳北面段差改修、中の峪ガレ場改修・地藏岳鎖場補強、笠捨越道改修等々の成果がありました、厚くお礼申し上げます。

5月下旬、茂原先生ぐるーぷ及び(株)斉藤鐵工の新人研修での来客もあります、ご協力お願いします。

(沖崎 記)



補給路第一ベンチ下の段差改修(電柱廃材使用)